

ZOCALO 2022 12 ▶ 2023 1

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

まるく／まわる

MOMASコレクション第3期
2022年12月3日(土) ~ 2023年2月26日(日)

年に4回の展示替で、収蔵品のさまざまな魅力をお伝えしているMOMASコレクション。3期のラインナップでは、シャガールほか名品を中心とするセレクションと、ミニテーマ展示「まるく／まわる」の2コーナーを予定しています。「まるく／まわる」では、回転したり円や球体をモチーフとする作品が集結します。

先史時代の環状列石から聖堂のドーム、天球図、曼荼羅、現代の抽象絵画、紋章や企業のロゴにいたるまで、視覚文化の中にはさまざまな〇が登場してきました。私たちの暮らしの中にも、時計やコイン、皿、タイヤ、太陽など、まるく／まわるものを多く見つけることができます。そのように身近なところにも存在する〇ですが、どのような意味を持っているのでしょうか。たとえば自分たちを中心にすえたときに目に映る世界。終わりも始まりもない完全なもの。めぐる時間。無限の宇宙。車輪から想像されるような回転—運動—変化。円陣や円満といったことばに象徴される、平和で満ち足りたイメージ。人類は〇のかたちに特別で神聖な力を認めてきたようです。では我々がMOMASコレクションの作品は、どのような〇の力を秘めているのか、少し探ってみましょう。

ゆがむ

輪郭がぼやけていたりずれていたり、完全ではない円。安達武生や泉茂の作品は、頭の中にある調和した〇のイメージとのずれや、わずかな居心地の悪さを感じさせます。一方で、現実には不完全なあり方のほうが自然な姿であることも思い起こさせるようです。(図1)



1

運動する

振り子の光の道すじを記録した志水児王の写真や、円盤を回転させるマルセル・デュシャンのオブジェ。物理的な現象の軌跡としての〇に出逢います。(図2)



2

光る

何億光年もはるか彼方の天体に親しみを覚えさせるようなタイガー立石の版画や、周囲の環境をあまねく映しこむ堀越陽子の鏡の球体彫刻など。森羅万象をとらえます。(図3)



3

増殖する

草間彌生は生命をつつみこむ細胞のように、上村次敏は限りなく増殖する分子のように円を駆使します。これらの中では、日常の感覚を超越したような時が流れているようです。(図4)



4

生きている、死んでいる

やわらかな陰影をはなつ人体のような球体のモチーフ。あるいは黒こげの供物のような彫刻。辰野登恵子と遠藤利克は、はっきりと具象的な姿を取らずとも、命の深淵を感じさせる作品を生み出しました。(図5)



5

〇はそれ自体は幾何学的な形でありながら、「眼」「地球」といった実体のあるものや、「真理」「永遠」といった抽象的なものまで、さまざまな事がらを広く象徴します。この冬は不思議な魔力に満ちた、まるく／まわる世界に酔いしれてみませんか。(G.R.)

※ 出品作品に変更が生じる可能性があります。

- 1 泉茂《折る円》油彩、カンヴァス 1981年頃
- 2 志水児王《緯度35度48分14.648秒/経度139度29分32.32秒 TYPE-I 23:34-23:38》ラムダプリント 2007年
- 3 堀越陽子《罅》ステンレス、鏡 1985年
- 4 草間彌生《魂たちが安息する穴》コラージュ、パステル、インク、紙 1975年 © YAYOI KUSAMA
- 5 辰野登恵子《Aug.-Oct.'92 III》エッチング、アクアチント、ソフトグランド・エッチング、紙 1992年

サマー・アドベンチャー「カッコイイ緑をつくろう！」

埼玉県立近代美術館では、美術館の“できごと”を楽しむというコンセプトで、ワークショップ「MOMASのとびら」を開催しています。夏休みはその拡大版として「サマー・アドベンチャー」を実施しました。今年度は、台風の影響もあり1回中止となってしまいましたが、他3回は感染症対策を講じ無事に開催することができました。

8月20日(土)は画家の内海聖史さんを講師にお招きし、小学生以上を対象にプログラムを行いました。まず初めに内海さんから「みんなが思う絵ってどんな感じ?」という問いかけがあります。「絵って自由なものだと思うんだよね。」内海さんの作品をモニターで見ると、天井に届くような大きさの作品や手でつまめる小さな作品、カンヴァスの形も四角だけではなく、とがっていたり、波々していたりと「絵は自由!」を体現しています。

今回のサマー・アドベンチャーは「カッコイイ緑をつくろう!」です。緑は、青と黄色を混ぜてできますが、本

当にそれだけでしょうか。かっこよくするにはどうしたらよいでしょうか。今回は、今までで1番自由でカッコイイ緑を目指します。そのために、絵の具の色は、緑以外の青、黄、赤、桃、橙…様々な色を用意しました。描画材も普段使う筆や刷毛だけでなく、スポンジや割り箸、緩衝材などを使います。制作が始まると、自分が使いたい色を好きなだけ使って自分だけの色を作ります。「黒っぽい緑」「光るような緑」。色を混ぜると多くの気づきがあり、1枚目、2枚目と進むにつれ、どんどんカッコイイ緑が誕生しました。画用紙をベランダに並べ、内海さんと鑑賞しますが、どれを見ても同じ緑はありません。ベランダから公園をみると様々な緑が見えました。「みんなが作った緑と似ているね。」自然の中にはたくさんの色があり、光の加減で色の見え



カッコイイ緑を作る参加者



内海さんとベランダで鑑賞している様子



内海さんの作品をみる参加者

方も変わります。最後は特別に用意した展示室で、このプログラムのために持ってきていただいた内海さんの実物の作品を肌で感じました。大きな作品を見ながら内海さんの想いもお話しいただき、とても充実した時間となりました。

色やかたち、景色などの見方の幅が広がると、絵の表現もどんどん自由になるのかもしれない。今後も、アーティストや作品をとおして新しい発見や素敵な思い出ができる普及活動を目指してまいります。(I.A.)

内海さんには、今回のサマー・アドベンチャーでの鑑賞のためだけに《Coriolis・コリオリ》という全長15mの作品を展示していただきました。参加者が鑑賞した作品は、他の会場では左図のように渦を描くような展示をされていましたが、当館ではまっすぐに並べて展示いただきました。今回の展示写真ではありませんが、天井に届くような作品、カンヴァスの形もさまざまな内海さんの下記の作品もあわせてご覧ください。



《Coriolis・コリオリ》2022年



《moonwalk・ムーンウォーク》2015年



《星空(七芒星)」「ポラリス(4芒星)」2012年



《mimic painting(波型)」2017年

photo: Ken KATO © UCHIUMI SATOSHI